

## 解説

### 落合 則子

本史料集は、東京都江戸東京博物館が平成十一年までに収集した勝海舟関係資料のうち、書簡・意見書等の文書類を収載したものである。

当館が所蔵する勝海舟関係文書は、平成元・六年度の二回にわたり、収集家より購入した文書類を核に、古書店からの購入や都民からの寄贈・寄託品によって構成されている。

この大部分が、平成十一年四月二十日～同年六月六日開催の企画展「没後一〇〇年 勝海舟」展で公開された。また、企画展の開催と併行して、これらの史料のマイクロフィルム撮影と基本的な調査が実施され、平成十一年十月から閲覧公開されている（マイクロフィルムの内容は、後掲「勝海舟関係資料 マイクロフィルム版目録」一覧表を参照）。

なお、当館収蔵の勝海舟関係資料には、「海舟日記」全二五冊および著作・雑記類が含まれるが、これらについては後刊の予定である。

さて、本巻に収載する文書類は、単独あるいは群の形で収集されているが、なかでも特徴的なのは、まとまって存在する意見書の自筆草稿群である。

海舟が、生涯をつうじて多数の意見書を江戸幕府あるいは明治政府に提出したことは広く知られ、その草稿類や写本もいくつか散在して認められる。

当館所蔵の文書類は、その大半が自筆草稿類であり、なかでも戊辰期、江戸開城の前後に海舟が作成した主要な意見書の草稿が数点入っている。この文書類からは、海舟の幕末維新期における自らの事績に対する自負が感じ取られ、これらが記念碑的な資料として、彼自身の手によって大切に保管されてきたであろうことが想像される。

この文書類は、一点から数点がまとめて卷子装された形で、二つの桐箱（うち一つは二段になっている）に納められている。これがいつ誰によって装丁されたかは確認できないが、題箋の記載や表具の劣化状態等からみて、海舟自身の手によるものではなく、海舟の没後あまり間を置かない時期に装丁されたであろうことが推測される。なお、東京大学史料編纂所に残されている大正末年撮影と思われる写真（本書所収16「御沙汰書」を撮影したもの）が、卷子の継紙が分離した状態で写っていることから、これらの卷子が、昭和初期頃に表紙と軸・紐・題箋のみ往時のものを残して修補され、現状にいたっていると考えられる。

各巻ごとの構成については、【別表】を参照されたい。また、装丁された文書の大半は、装丁時に截切等の手が入れられ、原型と異

なっている。これら現時点でとりうる書誌的な情報については、後掲各文書の解説でふれた。

二つの桐箱文書が、どのような伝来をたどったかの詳細は不明であるが、主要な自筆草稿が、これだけまとまった形で確認されたことは、海舟研究および近代史における史料研究にとって、少なからぬ意義をもつものとおもわれる。

ところで、勝海舟の著作については、これまでに三種類の「全集」が公刊されている。

戦前においては昭和二年から四年にかけて出版された改造社版『海舟全集』全一〇巻（徳富蘇峰ほか編）があり、その後四〇年ほどをへて、昭和四十七年から五十七年に勁草書房から『勝海舟全集』全二〇巻（別巻1・2巻あり 勝部真長・大口勇次郎ほか編）、昭和四十七年から五十八年に講談社から『勝海舟全集』全二三巻（別巻一巻あり 江藤淳・松浦玲ほか編）が刊行されている。

これら三つの「全集」は、「海軍歴史」「吹塵録」をはじめとする海舟の編纂・著作物を中心に、建言書や書簡、詩文・随筆の類が収載されており、いずれも海舟の遺文の完全網羅をめざしているが、いまだ決定版といえるものはない。三者の中では、講談社版が長い年数を費やして、自筆原本のような確実な底本をできるだけ博搜して翻刻する努力をしており、これが現段階での到達点ということ是可以する。

当館所蔵の海舟関係資料のほとんどは、これと同内容の資料が各全集のいずれかに収められている。しかし、一部未採録のものがあリ、本史料集は、これまでの「全集」を補完する役割を果たすものといえよう。

ところで、『象山全集』や『大西郷全集』等、幕末維新の思想家・政治家の著作・書簡類を集めた「全集」ものはこれまでに各種出されているが、勝海舟の場合、非常に多くの文章を残しているために、完全網羅は現在でも困難をきわめる。

さらに、状況を難しくしているのは、海舟が同じ題材・素材をもちいて何種類もの「作品」（とくに詩文について顕著にみられるので、あえてこのような表現を使う）を残していることや、海舟自身あるいは他人の手による稿本・異本の類がおびただしいことである。これらの整理・校合が膨大かつ煩雑な作業となる。

また、明治期に入り、海舟が関係して作られた編纂物、あるいは「解難録」などのような、自らの事跡をまとめた著作物の中に、主要な意見書類が多く収められており、自筆原本が確認されないものについては、これらいわば二次的資料を底本として「全集」に収載している場合も少なくない。

これまでの「全集」は、この問題を整理・解決できないまま刊行に至っているのが実状である。とくに講談社版は、編纂の過程でこの問題に気づいたが、問題の膨大さや出版事情等のため、十分に整

理できないまま世に送り出してしまったという苦悩の跡がうかがえる。

本史料集では、これらの問題をふまえ、なるべく原文書の原型を活かした形で釈文を編集し、海舟自身が推敲段階で削除訂正した箇所や訂正前の文言を、判読可能な限り復原した。その上で、当館所蔵文書と、三つの「全集」に収められた文書との間で、文言を比較照合し、異同箇所を注記をした。さらに、館外に現存する写本・異本についても、可能な限り校合した。文言の異同の中には、「全集」の出版過程における単純な誤植・誤読の類と思われる箇所が多分に含まれているが、そのような異同にも注記をほどこした。ただし、各全集とも、多くが書き下しをした形で載せられており、そのさいの読み方の違いによる異同と認められる箇所は除外した。

講談社版全集がすでに指摘していることであるが、本史料集における整理によって、勝海舟文書には同種の文書が複数存在し、それぞれが成立過程において異なる段階や性格をもっていることがあらためて確認された。これらの文書を史料として使用するには、それが二次的資料に拠っていないか、いつどのような背景をもって作成されたものかを、史料批判する必要がある。近代文書における史料学的分析の必要性を考えるについて、勝海舟文書はその問題点と素材を提示する、ひとつの好例となると思われる。

なお、当館所蔵の勝海舟関係資料には、文書・著作類のほかに、

書跡および遺品類があるが、本史料集およびマイクロフィルムには含まれていない。これら収載外の館蔵資料および館蔵外資料を含めた関係資料については、「没後一〇〇年 勝海舟展」展示図録（江戸東京博物館 平成十一年刊）を参考にされたい。

〔別表〕  
箱入り卷子装文書一覧

第1箱

卷子	卷子題箋	No.	資料番号	資料名	年代
1	西郷南州及大山格之助両先生書翰	12	89205150	勝海舟宛西郷隆盛書簡	(元治元年) 9月11日
		20	89205151	勝海舟宛西郷隆盛書簡	(慶応4年) 3月14日
		28	89205152	勝海舟宛大山綱良書簡	(明治5年5月) 26日
2	島津薩州公書翰	2	89205153	勝海舟宛島津斉彬書簡	(安政5年) 4月12日
3	海舟伯ヨリ越前老公へノ奉答文 海舟伯神戸海軍局碑文稿	14	89205155	松平春嶽宛勝海舟書簡草稿	(慶応元年) 10月5日
		不載	89205156	神戸海軍操練所碑文稿	(元治元年) 10月8日以前
4	官軍問罪ノ拳ニ関シ代訴文案 戊辰当時人心離散ニ関シ下民生活上ニ付大総督府へ建言草案	18	89205158	勝海舟歎願書草稿 (京都新政府軍の江戸攻撃に対する代訴文)	(慶応4年正月18日)
		23	89205159	勝海舟意見書草稿 (「人心離散之御答」)	(慶応4年) 閏4月28日
5	戊辰頃ニ於ル時世ニ関スル訴願ノ草案 大臣遭変ニ関スル意見書草案写	19	89205161	勝海舟意見書草稿 (京都新政府へ関東の実情につき訴文)	(慶応4年2月15日)
		35	89205162	勝海舟意見書写 (条約改正につき)	(明治22年) 10月20日
6	八田知紀書翰	24	89205163	勝海舟宛八田知紀書簡	(慶応4年) 7月13日

第2箱

1	江戸御警衛向ニ関スル意見書	4	89205165	勝海舟意見書写 (「江戸御警衛」)	(文久3年8月)
		5	89205166	勝海舟意見書草稿 (「御府内四方要塞大略」)	(文久3年8月)
2	海舟伯近時私議草案	40	89205168	勝海舟意見書草稿 (「近時私議第一」)	明治28年11月21日
		39	89205169	勝海舟意見書草稿写 (「五月之私議草稿扣」)	明治28年5月
3	海舟伯洗足軒ノ記及歌	不載	89205171	「洗足軒の記并歌」	明治24年仲春
		不載	89205172	同	—
4	朝鮮処置愚説草稿外売点 (内題箋) 柳原前光ヨリ朝鮮ニ関スル海舟先生著書借用ヲ求ムル書簡	38	89205174	勝海舟意見書草稿 (「朝鮮所置愚説」)	明治28年5月21日
		26	89205175	勝海舟宛柳原前光書簡	(明治2年) 10月7日
5	徳川家々政ニ付愚存草案	37	89205177	勝海舟意見書写 (「徳川家々政ニ付愚存」)	明治27年7月
		33	89205178	勝海舟意見書写 (徳川家手許金につき)	(明治10年以前)
6	伊勢両宮御警衛向ニ付書付	1	89205179	勝海舟意見書写 (「伊勢両宮御警衛向ニ付申上候書付」)	安政2年4月
7	台湾ニ関スル意見書草案外三点 (内題箋) 台湾蕃地戦端開始ノ節ハ軍事方略専任内達書 (内題箋) 台湾蕃地処分上支那ニ関スル内達説明書 (内題箋) 台湾偵察ニ付三条実美公ヨリ海舟先生宛書簡	30	89205181	勝海舟意見書草稿 (台湾出兵につき)	(明治7年5月頃)
		31	89205182	内達 (台湾出兵につき)	明治7年8月2日
		32	89205183	内達演説書 (台湾出兵につき)	(明治7年8月2日)
		29	89205184	勝海舟宛三条実美書簡	(明治5年) 11月朔日
8	海舟伯征長ニ関スル意見草案外二点 (内題箋) 海舟伯芸州表へ御用向ノ為罷越タル心得伺書草案	11	89205186	勝海舟意見書草稿 (第一次長州征討につき)	(元治元年8月以降)
		15	89205187	勝海舟伺書草稿 (「芸州表江為御用向罷越候心得伺」)	(慶応2年) 8月17日
9	海舟伯家茂將軍上洛ニ付建白書草案外四点 (内題箋) 一、海舟伯家茂將軍再上洛ニ付松平春嶽公ニ呈スル書草案 (内題箋) 一、海舟伯時局ニ関シ付松平春嶽公ニ奉ルノ書草案 (内題箋) 一、松平春嶽公ヨリ將軍上洛ニ付海舟伯宛書状 (内題箋) 一、大坂町奉行松平大隅守ヨリ海舟伯宛書翰	6	89205189	松平春嶽宛勝海舟書簡草稿	(文久3年) 9月10日
		8	89205190	勝海舟意見書草稿 (徳川家茂再上洛につき)	(文久3年) 11月(12日頃)
		9	89205191	松平春嶽宛勝海舟書簡草稿	(元治元年2月6日)
		7	89205192	勝海舟宛松平春嶽書簡	(文久3年) 11月10日
		3	89205193	勝海舟宛松平信敏書簡	(文久3年) 7月8日
10	和宮様へ事変ニ付御警衛及御上退ニ関シ心得方勅旨御沙汰書外売点 (内題箋) 和宮様御帰洛ニ関シ総督宮ヨリ御通知書	17	89205195	御沙汰書副状	(慶応4年正月受領)
		16	89205196	御沙汰書 (和宮警衛と帰洛の便宜につき)	(慶応4年正月受領)
11	佐久間象山先生復仇ニ関シ新撰組土方歳三ヨリ海舟伯ニ宛タル書翰外一点 (内題箋) 佐久間象山先生不慮ノ次第報告書	13	89205198	勝海舟宛土方歳三書簡	(元治元年) 9月16日
		10	89205199	佐久間象山遭難報告書	(元治元年) 7月16日
12	総督宮ヨリ江戸鎮撫ニ関スル御委任書外売点 (内題箋) 徳川家処分ニ付海舟伯ヨリ大総督宮有栖川宮ニ奉ルノ書草案	21	89205201	東征大総督府委任書 (江戸鎮撫につき)	(慶応4年) 閏4月2日
		22	89205202	勝海舟歎願書写 (徳川慶喜江戸帰住につき)	慶応4年閏4月(4日)
13	海舟伯ニ関スル(サンフランシスコクロニカル)新聞記事 大杉某訳文	不載	89207047	サンフランシスコクロニカル新聞記事訳文	明治27年12月28日訳
		不載	89207048	サンフランシスコクロニカル新聞記事切り抜き	1894年(明治27)9月24日



## 資料解説

### 1 勝海舟意見書写（伊勢両宮御警衛向二付申上候書付）

安政二年四月

資料番号 89205179

法量（本紙）縦二四・〇cm×横八九・八cm

現状は卷子装。勝海舟の自筆写本。二つ折りの料紙（四枚か）に書かれている。

安政二年（一八五五）正月十八日、海舟は異国応接掛手附蘭書翻訳御用を命じられ、正月から三月にかけて、幕府の目付海防掛大久保一翁に随伴して、伊勢湾から摂津湾にかけて巡覧した。この間、伊勢で竹川竹斎と会い、竹斎の伊勢湾警衛に関する論文を贈られた。本文書はこれを参考に、海舟が江戸帰府後書いたものと思われる。提出先は幕府あるいは竹斎にあてて書かれたものか不明である。

伊勢神宮の防衛論は黒船来航を契機に高揚し、井坂徳辰「神境防夷」（嘉永六年）や竹川竹斎「神国攘夷神乃八重垣」（安政二年）等が書かれた。

竹川竹斎は、伊勢国射和村を本拠に大坂・江戸に店をもつ幕府の

為替御用商人で、海舟とは弟の竹口信義とともに深い親交があった。

嘉永六年、江戸湾防衛を論じた「海防護国論」を書いて海舟に贈り、これが幕府内で高い評価を受けた。また、地域の殖産のため製茶業の振興や射和万古陶器を創製、「射和文庫」を設けて教育にも尽力した。慶応二年（一八六六）、勘定奉行小栗上野介忠順の招きで出府、諮問を受け、イギリス公使パークスと面会した。明治十五年（一八八二）十一月没、六十歳。

本資料はいずれの全集にも未収である。

### 2 勝海舟宛島津斉彬書簡（安政五年）四月十二日

資料番号 89205153

法量（本紙）縦一六・二cm×横一二七・八cm

現状は卷子装。

在鹿児島島の薩摩藩主島津斉彬から、長崎海軍伝習所の勝海舟にあてたもの。

来年五月には海軍伝習所に薩摩藩から伝習生を派遣する予定であることを告げ、長崎奉行所で留め置かれている薩摩藩発注の輸入剣付小銃五〇〇挺の早期引き渡しに、便宜を図ってくれるように依頼している。さらに、京都の政情と時局を憂い、武備充実の急務や攘

夷の非などを述べている。

文中、「備中」は老中堀田正睦、「図書殿」は長崎在勤目付で長崎海軍伝習所を総監していた木村喜毅、「伊沢氏」は幕府伝習生伊沢謹吾をさす。

長崎海軍伝習所は、安政二年（一八五五）十月に開設、海舟は艦長候補の一人として伝習に派遣された。幕府がオランダに発注した咸臨丸は、同四年（一八五七）八月、第二期伝習所教師団を乗せて長崎に廻航された。咸臨丸は実地航海の練習船として使用され、同五年三月には、オランダ教師団長カッテンディーケの同乗で、平戸・下関・鹿児島を経て長崎に戻る九州一周の航海をおこなった。途中三月十五日、咸臨丸は錦江湾口の山川港に入り、そこで一行の来航を待っていた島津斉彬と会った。ついで、五月十三日木村喜毅を加えた咸臨丸一行は再び山川港に入り、斉彬と再会した。この時斉彬は咸臨丸に乗り、鹿児島まで船旅をした。

海舟は、この書状を二回の鹿児島航海の間に長崎で受け取り、四月十八日に返事を出している（勤草書房版全集別巻1・講談社版全集22所収）。

なお、斉彬はこの年七月十六日、鹿児島で急死した。

本資料は、海舟がゆかりの人物の書翰などを影印して収めた「亡友帖」（明治十一年）に収載されている。

〈改造社10（亡友帖）影印本〉 勤草別巻1 講談社22（亡友帖）

### 3 勝海舟宛松平信敏書簡

（文久三年）七月八日

資料番号 89205193

法量（本紙）縦一六・六cm×横一六六・六cm

現状は卷子装。

大坂町奉行松平大隅守信敏から勝海舟にあてた書簡。

幕府有司の因循な態度を批判した海舟からの書状を受けて、自分も歎息の至りであると述べ、徳川家の行末を憂慮している。また、坂本龍馬が信敏を訪ねてきたこと、佐藤与之助と龍馬から五〇〇両（神戸海軍操練所の建設資金か）を預かったこと、軍艦が大坂に廻航された時には自分の家来を乗り込ませ、海舟の属下に置いてほしいこと、鉄製砲車台の回送要求等の事項を書き送っている。

「海舟日記」文久三年（一八六三）七月七日条に、大坂の塾中からの来状として「龍馬京都より帰坂仕候て同道仕、大隅守様江罷出時勢之儀申上候」と、龍馬が信敏に話した内容が記されている。

この年四月二十三日、海舟は將軍家茂から直接神戸海軍操練所の設立許可を得て、準備を進めていた。五月には建設資金の援助を求めて、坂本龍馬を越前に遣わしている。

松平信敏（生没年未詳）は、文久三年五月より大坂町奉行の職にあり、摂海警衛のため、勘定奉行津田正路と軍艦奉行並の海舟とともに、神戸海軍操練所と付属の製艦所の設立調査を命じられ、操練

所の設立に協力した。慶応四年（一八六八）正月、鳥羽伏見の戦に敗れた徳川慶喜とともに江戸へ帰り、勘定奉行に任じられたが、二月にその職を解かれた。

なお、本資料については、大正十四年（一九二五）維新史料編纂会によって謄写されたものが、東京大学史料編纂所に所蔵されている（「維新史料引継本」）。

〈勁草別巻2（松平春嶽書状とする） 講談社別巻〉

#### 4 勝海舟意見書写（江戸御警衛）

（文久三年八月）

資料番号 89205165

法量（本紙）縦二四・一cm×横二四五・九cm

現状は卷子装。勝海舟の自筆写本。二つ折りの料紙（九枚か）に書かれている。一枚めの表紙にあたるところには、「江戸御警衛」の表題が記されている。虫損がはげしく、装丁時に修補がなされている。

表題にあるとおり、外国と戦闘を交えることになった場合の、江戸湾岸での防備体勢など具体的な策が論じられている。冒頭に「文久二年十一月鎖港の議起り…」と後年と思われる自筆の注記があるが、横浜鎖港問題が政治上の焦点になるのは文久三年のことである。

り、海舟の記憶違いである。

文中にみえる「治右衛門」は、摂津の廻船問屋で、文久三年二月海舟が摂津湾の砲台築造を命ぜられた時に工事を請け負った加納治郎作をさすと思われる。一方、灘の酒屋で加納治郎右衛門という人物もあり、「氷川清話」で海舟は、治右衛門を灘の酒屋で治五郎（講道館柔道の祖）の父であるといっている。しかし、治五郎は治郎作の息であり、海舟が両者を混同しているのではないかと思われる。

江戸湾の防衛は、文久元年（一八六一）から小野友五郎をはじめとする幕府の軍艦操練所メンバーによって、台場の充実など具体的な構想が検討されていた。その途上にあった文久三年春、生麦事件の賠償問題をめぐって英艦が品川沖にせまり、一時は開戦かと思われた。この問題は、老中格小笠原長行の判断で、幕府が賠償金を支払うことで決着し、戦争は回避された。

この時將軍家茂は上洛中で、軍艦奉行並の海舟も随行、四月海舟は將軍から神戸海軍操練所設立の許可を得ている。六月に家茂が帰府すると、幕府内は攘夷の実行と江戸湾の警衛をめぐり紛糾した。

海舟は、幕府海軍構想について江戸の軍艦操練所メンバーと考えを異にしており、江戸湾警衛についても、小野らの構想する防衛策に批判的であった。この意見書は、小野構想への対案として海舟が作成したものとも考えられる。

「海舟日記」文久三年八月十八日条に「此日御殿山下砲台より品

川海岸并御船越中島江出張、中納言殿閣老諸役同船、警衛之事を申す、御殿山に堡塞を築き品海より内江入る港筋へ礁を造るへしと云、其外警衛之備之事を申す」とあり、この日海舟は一橋慶喜（中納言殿）をはじめ幕府の閣老諸役を案内して、江戸湾を船で巡航し、江戸警衛について上申した。この時にこの意見書が提出されたかは不明。

〈勁草別巻2〉

5 勝海舟意見書草稿（「御府内四方堡塞大略」）（文久三年八月）

資料番号 89205165（前号と同番号）

法量（本紙）縦一六・六cm×横一〇五・二cm

現状は卷子装。勝海舟の自筆草稿。前号の意見書写「江戸御警衛」とは料紙が異なり、二枚継紙一紙からなっている。前半にメモのようにして書かれた事項の後に、「御府内四方堡塞大略」と題して方策が記されている。内容からみて、前号資料と関連していることがうかがえる。

文久三年（一八六三）春の英艦品川沖侵入事件にさいし、幕府は（將軍家茂は上洛中）江戸市中の子女や老弱者に立ち退きを命ずる触を出した。この避難騒ぎに乗じて、草賊が資財を略奪するなど、

市民生活に混乱が生じた。この事態をふまえて、海舟が作成した案が本文書である。御家人等小禄の者を家族とともに江戸の縁辺にあらかじめ避難集住させ、各所に堡壘を築いて草賊からの害を防ぐというもので、六郷・下高井戸・新宿など具体的に移住先が挙げられ、住人を統率する世話役の設置などの具体的な実施体制にも言及している。

〈勁草別巻2〉

6 松平春嶽宛勝海舟書簡草稿（文久三年）九月十日

資料番号 89205189

法量（本紙）縦一六・二cm×横一〇一・四cm

現状は卷子装。在大坂の勝海舟から、松平春嶽にあてた書簡の自筆草稿。冒頭に、後年のものと思われる海舟の自筆で、二行の注記がされている。これには「九月十一日」と書かれているが、日記等の記載から、九月十日の誤りか。

文久三年（一八六三）八月二十八日、海舟は將軍家茂の再上洛について朝廷への使者となった老中酒井雅樂頭忠績に付き添い、急遽上京、九月九日大坂に着いた。海舟は、六月家茂が江戸に帰府して

から江戸の幕議が紛糾しているさまを嘆き、春嶽が上京するとの風聞に有志は期待し、一日千秋の思いで待っている旨を伝え、早期の上京を促している。

文中の「島津三郎」は、薩摩藩主の父島津久光をさす。

冒頭注記によると、この書状は、海舟が塾生近藤昶次郎と加藤廉之助を越前に遣わして、春嶽のもとに届けられた。「海舟日記」文久三年九月二十三日条には、近藤らが越前から帰ってきたとして、この書状の写しと同月十七日付の春嶽からの返書を書きとめている。春嶽からの返事は、現在逼塞中で朝廷から許しが出ていないから、すぐには上京できないというものであった。当時越前藩では、芋藩上京派が要職を追われ、春嶽のブレン横井小楠も福井を去っていた。海舟からの書状に力を得た春嶽は、十月十八日京都に入った。なお、「続再夢紀事」には、この書状と春嶽の返書の写しが収められている。

なお、本資料については、大正十四年（一九二五）維新史料編纂会によって謄写されたものが、東京大学史料編纂所に所蔵されている（「維新史料引継本」）。

〈勁草18（「海舟日記」） 講談社2〉

## 7 勝海舟宛松平春嶽書簡

（文久三年）十一月十日

資料番号 89205192

法量（本紙）縦一六・九cm×横二三・一cm

現状は卷子装。

京都に入った松平春嶽から、在江戸の勝海舟にあてた書簡。

老中酒井雅楽頭忠績に随行し上京していた海舟は、文久三年（一八六三）十一月三日江戸へ帰り、翌四日には將軍家茂の再上洛を上言して、まもなく上洛が決定した。この書状で春嶽は、尽力した海舟の労をねぎらい、上洛の供奉に板倉勝静（備中松山藩主）・水野忠精（山形藩主）・酒井忠績（姫路藩主）の三老中が加わらないという情報を得て、公武一和の重大事を協議するには幕府の有力な閣老が必要のため、少なくとも板倉だけでも必ず供奉するよう運動することを強く要請している。

文中の「小松帯刀」は、薩摩藩家老。

「海舟日記」文久三年十一月十五日条には、この書状の写しが記されており、「嗚呼、此侯愛国杞憂之念、此手翰中を以て可見、惜哉、末世之弊誠実如君有りとはいへとも、事行ハれず空敷区々として奔命す、実可歎」という感想が添えられている。

なお、本資料については、大正十四年（一九二五）維新史料編纂会によって謄写されたものが、東京大学史料編纂所に所蔵されてい

る（「維新史料引継本」）。

〈勁草18（「海舟日記」） 講談社別巻〉

8 勝海舟意見書草稿（徳川家茂再上洛につき）

（文久三年）十一月（十二日頃）

資料番号 89205190

法量（本紙）縦一六・六cm×横一一〇・九cm

現状は卷子装。推敲の多い長文の意見が書かれ、末尾には、後筆と思われる海舟の自筆で、この意見書を出した時の事情が書かれている。最末尾に「最初に可入」の文があり、そこで料紙が切られているが、この後に文が続いていたものかどうかは不明。虫損位置の規則性から、本資料が冒頭から末尾に向かって、巻いた形で保存されていたことが推測される。

松平春嶽・海舟ら公議政体派にとって、將軍家茂の再上洛は、公武一和と参預会議の実現をめざすものであった。この意見書で海舟は、未曾有の国難に際し、西国雄藩の諸侯が集まり、朝幕一致して興国の大政をおこそうとする大事な時にもかかわらず、將軍家茂の再上洛を延引しようとする者が幕府内にいることを憤り、上洛の時機を誤り、人心の信用を失ってはならないと訴えている。

「海舟日記」文久三年（一八六三）十一月十二日条には「縫殿（筆者注・若年寄松平〔大給〕乗護）に、御上洛之議御遅寛あるへからす」と意見を呈したことを記し、さらに「夫幕府日本之政を執る<sup>（下略）</sup>処、然るに其御政弊して唯御一家之事而已、此大義を明かする者殆と<sup>（下略）</sup>少なし、危哉 皇国」と慨嘆してこの件を結んでいる。

結局家茂は海路で上洛することになり、十二月二十八日海舟の指揮する翔鶴丸で品川を出帆し、翌元治元年正月八日大坂に着いた。

なお、本資料については、大正十四年（一九二五）維新史料編纂会によって謄写されたものが、東京大学史料編纂所に所蔵されている（「維新史料引継本」）。

また、本資料と同文で「十二月十二日」の日付となっている海舟自筆本（二つ折り料紙六枚からなる。現状は卷子装）が、早稲田大学図書館所蔵「南大曹旧蔵 名家書翰集」中にある。講談社版全集はこれを底本としており、十一月に出した意見を海舟があらためていずこかに提出したものと推測している。

〈講談社別巻〉

9 松平春嶽宛勝海舟書簡草稿

(元治元年二月六日)

資料番号 89205191

法量(本紙) 縦二一・三cm×横二一・六cm

現状は卷子装。

在大坂の勝海舟が松平春嶽にあてた書簡の自筆草稿。

冒頭の日付は「子三月八日」とあるが、「海舟日記」元治元年(一八六四)二月六日条に、「今朝春嶽より黒龍船之儀二付酒井十之丞来而内話有之、同人江附し一書を呈し」とあり、本文書とほぼ同文が記されている。この記事および当時の政治状況からみて、三月八日の日付は誤りであると考えられる。

「日記」の文言と本文書の異同を比較すると、本文書で「五名様<sup>(か)</sup>方にて万事断然御切出被遊」の部分で、日記では「参預之御方にて万事断然御切出遊ハレ」となっている(なお、東京大学史料編纂所の写本では、この部分を「五公様」としている)。

日付の誤記などから、本資料が後年海舟が写した自筆写本である可能性もある。

文久三年(一八六三)末、有力諸侯からなる朝議参預が任命され、再上洛した將軍家茂のもとで、京都での諸侯会議が実現の運びとなった。海舟は参預会議に列席する春嶽に期待を寄せ、関東の諸侯司(幕閣)に会議の挫折をもくろむ勢力があるが、頓着せずに国家

のため一橋慶喜はじめ参預の面々の英断を祈ると励ましている。文中の「中納言様」は、一橋慶喜をさす。

海舟自身はこの前日の二月五日、慶喜から長崎出張を命じられており(二月十四日出発、四月十四日京都帰着)、海舟不在中の二月十六日参預会議が開かれたが、成果を挙げることなく解体した。

なお、本資料については、大正十四年(一九二五)維新史料編纂会によつて謄写されたものが、東京大学史料編纂所に所蔵されている(「維新史料引継本」)。

〈勁草18(「海舟日記」) 講談社1(幕末日記)〉

10 佐久間象山遭難報告書

(元治元年) 七月十六日

資料番号 89205199

法量(本紙) 縦一四・七cm×横二三九・七cm

現状は卷子装。信濃松代藩士で兵学者の佐久間象山の暗殺事件に関する報告書の第二報か。

上洛中の將軍家茂の命で公武合体・開国佐幕を掲げて活動していた佐久間象山(海舟の妹順子の夫)は、元治元年(一八六四)七月十一日、天皇彦根遷座計画への参画を疑われて、京都三条木屋町で尊攘派により暗殺された。

本資料の内容は不明の部分が多いが、象山の遺児恪二郎をかくまう者が京中にいなくて困っていたところ、仙台藩の医師垣生玄栄が引き受けてくれたこと、近日中にひとまず郷里信濃国松代へ帰り、いずれかの藩に身を寄せ、再起をはかりたいこと等を伝えている。

この事件について、関係者は内々に処理しようとしたが、十四日になり賢之助らと呼ばひ出されて「別紙之通被仰付」（別紙の内容不明）、十六日夕には、遺体処理など詳細な報告を明朝までに提出するよう、奉行所から求められたことを報告し、難が恪二郎に及ぶ前に潜伏し、時を俟ちたいと書いている。

差出人のうち、「賢之助」は松代藩士蜷川賢之助。宛名人のうち、「又兵衛」「源之丞」は、松代に在る象山の親類依田又兵衛・源之丞。また、宛名最後の「北山御母義様」は、藩医北山林翁に嫁した象山の姉けいをさすと思われる。

この報告書が、どのような経路で海舟の手許にもたらされたかは未詳である。

本資料はいずれの全集にも未収である。

## 11 勝海舟意見書草稿（第一次長州征討につき）

（元治元年八月以降）

資料番号 89205186

法量（本紙）縦二〇・六cm×横四七・三cm

現状は卷子装。勝海舟の自筆草稿。二つ折りの料紙（二枚か）に書かれている。

元治元年（一八六四）七月、幕府は長州征討を決定したが、いまだ躊躇していた折、八月五日英仏米蘭四国艦隊は下関砲撃を実行した。禁裏守衛総督一橋慶喜は、砲撃阻止のため、海舟の豊後姫島派遣を決めた。海舟は、その前の二月にも、英仏艦隊が長州へ報復砲撃するとの報で長崎に派遣され、延期の交渉をおこなった。しかしその後の幕府の明確な対策が示されず、ついに砲撃が実行された。命令を受けた海舟は軍艦で向かい、八月十四日姫島に着いたが、その時すでに砲撃は終わって日数がたっていた。

この意見書で海舟は、この時外国奉行が帆船で遅れて来たことを非難し、自分が神戸海軍操練所で要求してきた、軍艦の神戸への充分な配備などが実現しないことを取り上げ、武備充実と富国の大策を打ち立て、国民一致して列強に対抗すべきである時に、内外の事件に対してこのような因循些末な態度では、国民や外国の信用を失うと論じている。



なお、本資料については、大正十四年（一九二五）維新史料編纂会によって謄写されたものが、東京大学史料編纂所に所蔵されている（「維新史料引継本」）。

〈講談社別巻〉

12 勝海舟宛西郷隆盛書簡

（元治元年）九月十一日

資料番号 89205150

法量（本紙）縦一六・五cm×横五九・八cm

現状は卷子装。書簡の宛名書にあたる端裏上書が切断されて、本紙冒頭に貼り継がれている。

差出人の「大島吉之助」は西郷隆盛の変名。大坂の旅宿にいる勝海舟に会談の日時を問い合わせた書状。この年の七月十八日に京都で禁門の変が起き、西郷は薩摩藩兵を指揮し、長州勢を破った。変後、幕府は長州藩征討を決定したが、諸議定まらず混迷が深まっていた。

この日、西郷は薩摩藩士吉井幸輔（友実）と二人で海舟を訪ね、今後の政局について幕臣である海舟に意見を求めた。これに対し海舟は、幕閣が大局を見ず、小節にこだわって空論を重ねている実態を指摘し、このままでは幕府は瓦解するであろうと語った（「海舟日

記」元治元年九月十一日条）。幕府主導の時局打開を考えていた西郷は、この言葉に衝撃を受け、以後倒幕論に傾いていったといわれる。なおこの書状は、「亡友帖」（明治十一年）に収載されている。

〈改造社10（「亡友帖」） 勁草別巻1 講談社22（「亡友帖」）

13 勝海舟宛土方歳三書簡

（元治元年）九月十六日

資料番号 89205198

法量（本紙）縦二〇・〇cm×横一二八・一cm

現状は卷子装。冒頭、宛名部分が端截されて貼り継がれている。京都の新撰組土方歳三が、神戸にいる勝海舟にあてた書状。「阿波守」は安房守の誤り。

暗殺された佐久間象山の子息で、海舟には義理の甥にあたる「三浦敬之介」（10 「佐久間象山遭難報告書」中の恪二郎の変名）を、山本寛馬（象山の門弟で会津藩士）からの頼みで、新撰組が預かっている旨を知らせたもの。象山を暗殺した者を探索中であるが、長州藩につながる者に違いなく、敬之介には、真に父の仇をとるなら「文武研究」に打ち込むように説得しており、責任をもって預かるので心配ないようにと伝えている。また追書で、局長近藤勇が將軍上洛の周旋のため江戸へ下向しているので、自分が代理をしている

ことを記している。

象山は海舟の妹順子を正妻としたが、順子との間に子はなく、恪二郎は妾きくの生子である。象山暗殺当時、恪二郎は十七歳で、父の仇を討つべく新撰組に入隊した。その後海舟の説得で新撰組を離れ、紆余曲折をへて明治四年（一八七一）海舟を頼って松代から上京、名を恪と改めた。明治十年、愛媛県松山裁判所判事として赴任中急死した。

〈勤草別巻2 講談社別巻〉

#### 14 松平春嶽宛勝海舟書簡草稿

（慶応元年）十月五日

資料番号 89205155

法量（本紙）縦一六・二cm×横七五・七cm

現状は卷子装。

前年の元治元年（一八六四）十一月、海舟は軍艦奉行を罷免され、翌年三月神戸海軍操練所も閉鎖された。海舟の家計困難の様子を聞き、在福井の春嶽は九月二十二日、江戸に閑居中の海舟に書状を送り（勤草書房全集別巻2 講談社全集22所収）、越前藩士荻野小四郎に託して援助の金品を届けた。これに対する返書が本書状である。

春嶽から送られた特賜に対し、海舟は厚く礼を述べ、さらに条約

勅許と兵庫開港を求めて摂津湾に侵入した英米仏蘭の四国艦隊への対応について、春嶽から意見を求められたことに対して回答している。

この年五月、将軍家茂は長州再征のため上洛、大坂城に入っていた。開港問題をめぐっては、朝幕間で紛糾し、家茂が辞表を用意するまでに至った。海舟は開港問題について、幕府はうまく対応できないから、これを契機に「一朝御内政御更張」が実現されれば、十日を出ずして解決するであろうと述べている。また、江戸は「鎖国之御政事」で、言論も規制されている状況を嘆じ、「尊王攘夷」をもじって今の人心は「損王讓夷」になったと皮肉っている。

本資料の海舟自筆清書が、国立国会図書館憲政資料室所蔵の「大久保一翁文書」中に入っている（ただし写真）。冒頭に「慶応元乙丑十月廿二日」と、他筆で注記されている。春嶽あての書状が一翁文書の中にある理由、また「十月廿二日」の意味については不明である。講談社版全集は、この憲政資料室本を底本にしている。

〈勤草別巻1 講談社2〉

15 勝海舟伺書草稿（芸州表江為御用向罷越候心得伺）

（慶応二年）八月十七日

資料番号 89205187

法量（本紙）縦二〇・六cm×横五〇・五cm

現状は卷子装。二つ折りの料紙（二枚か）に書かれている。

第二次長州征討中の慶応二年（一八六六）八月十七日、長州藩との停戦調停交渉の命令を受けた勝海舟が、出発前に一橋慶喜に使命の内容を簡条書きにして確認を求めた伺書の草稿。

文面は推敲痕が著しく、「△」「前」「後」などの記号を用いて、項目の順序の入れ替えや文の移動を指示している。文の内容は、既刊の全集に所載のもの（底本は後年の二次的資料）とほぼ同じであるが、本資料において海舟みずから記入した指示を読みとりこれに従うと、項目の順序や文章の流れが、全集と大きく異なってくる。

さらに、本資料の筆跡と料紙は、9 松平春嶽宛書簡草稿（元治元年）と酷似しており、9 の資料が後年の自筆写本とすると、本資料の作成年代も検討の余地があると思われる。

「海舟日記」慶応二年八月十七日条には、「参館、御使ニ付心得之廉御伺、即以 御直筆ヲ以而御聞濟書付御下ケ」とある。この伺書に對して、慶喜は「見込之趣尤に存候間、十分取計可申事」と書いた付箋をつけて返したという。

海舟は八月二十日に兵庫を發ち、広島經由で宮島に赴き、九月二日同地で休戦を協定した。ところが海舟の出發直後の八月二十一日に、慶喜の要請により、將軍家茂の喪を理由に長州藩に對する停戦の勅令が出發されており、海舟の協定交渉を困難にした。

海舟がかかわった政治的事柄や身のまわりに起こった事件等を記録した「解難録」（別名「海舟余録」 明治十七年刊）に、この伺書の全文が収められている。また、講談社版全集は、海舟の没後刊行された「海舟伝稿」を底本としている。

なお、本資料については、大正十四年（一九二五）維新史料編輯會によつて謄写されたものが、東京大学史料編纂所に所蔵されている（「維新史料引継本」）。

〈改造社9「解難録」 勁草11「解難録」 講談社2〉

16 御沙汰書（和宮警衛と帰洛の便宜につき）

（慶応四年正月受領）

資料番号 89205196

法量（本紙）縦二一・一cm×横一〇二・一cm

現状は卷子装。朝廷より勝海舟にあてた内命書。これに副状がある（次号）。

慶応三年（一九六七）十月の大政奉還後、京都や江戸の情勢が容易ならざる事態にいたったので、万一の事変に備え、朝廷より和宮（徳川家茂夫人・静寛院宮）の身の安全と、帰京に際しての海陸の便宜を図ることを依頼したもの。

鳥羽伏見の戦に敗れた徳川慶喜は、慶応四年（一八六八）正月十二日江戸に帰還し、十七日には海舟を海軍奉行並に任じて事態の收拾にあたらせた。

「雑記 瓦解以来會計草稿」（江戸東京博物館蔵 勁草書房版全集 21所収）には、慶応四年正月（富田鉄之助「海舟年譜」では二十二日とする）に和宮の侍医中山撰津守（暉）が海舟のもとに持参したとして、この御沙汰書の写が収められている。また、「復古記」慶応四年正月十四日条には、大久保一翁宛の同文の文書と副状が収載されている。

京都の公家橋本実麗の日記によると、慶応三年十二月二十一日、実麗の嗣子実梁が、当時帰京していた和宮の侍女玉島にこの内命書を授け、中山から時期を見て一翁と海舟にそれぞれ渡すように命じたという（武部敏夫「和宮」）。これに従えば、内命書の発給日は鳥羽伏見の戦の前で、まだ一翁と海舟が抜擢される以前であり、この時期の微妙な政局と一翁・海舟の立場を考える上で興味深い。

なお、本資料は、大正十五年（一九二六）維新史料編纂会によって写真撮影されており、写真が現在東京大学史料編纂所に所蔵され

ている（「維新史料引継本」）。この写真を見ると、本資料が卷子装の継目から分離された状態で撮影されている様子がうかがえる。このことから、当館所蔵の桐箱文書が、大正十五年の時点では何らかの形で破損しており、その後修補されて現在に至っていると推測される。

〈改造社 9 勁草 21（海舟秘記）〉

## 17 御沙汰書副状

（慶応四年正月受領）

資料番号 89205195

法量（本紙）縦二一・一cm×横一〇〇・一cm

現状は卷子装。前号の副状。

万一の際には和宮の警衛を頼むという天皇の意向を伝えている。

〈改造社 9 勁草 21（海舟秘記）〉

18 勝海舟歎願書草稿（京都新政府軍の江戸攻撃に対する代訴文）

（慶応四年正月十八日）

資料番号 89205158

法量（本紙）縦一五・八cm×横六一・三cm

現状は卷子装。

慶応四年（一八六八）正月三日鳥羽伏見の戦に敗れ、十二日に江戸へ帰還した徳川慶喜は、海舟を召し出し、十七日に海軍奉行並に任命した。京都の新政府軍が徳川の罪を問うため進発したとの報に接した海舟が、越前の松平春嶽を通じて新政府の参与あてに提出した歎願書の草稿。内戦の虚に乗じて西洋諸国の介入を受けたインドや中国の例をひき、新政府に対し同国民同士が戦っているうちに欧米諸国につけこまれる危険を論じている。さらに、「公平を唱へて大私を挟み」と、薩長の行動は私利にもとづくものと強く非難している。

これとほぼ同文（「口に勤王を…」のくだりなど若干異なる箇所がある）の海舟自筆の歎願書が、「越葵文庫」（松平宗紀氏蔵 福井市立郷土歴史博物館保管）中に保管されている。こちらが最終的に清書・提出された正本と思われる。講談社版全集は、これを底本にしている。また、越前藩士中根雪江「戊辰日記」にも、正月十八日付の春嶽宛海舟書簡とともに、越葵文庫本の歎願書が写されている。

なお、「慶応四戊辰日記」（講談社蔵 講談社版全集1所収）慶応四年正月十八日条に、「越前江价して参与江一書を呈進す」として歎願書の全文が記されている。

〈改造社9 勁草14・19（「海舟日記」） 講談社1（「慶応四戊辰日記」）・2〉

19 勝海舟意見書草稿（京都新政府へ関東の実情につき訴文）

（慶応四年二月十五日）

資料番号 89205161

法量（本紙）縦二四・〇cm×横六六・三cm

現状は卷子装。二つ折りの料紙（二枚か）に書かれている。

京都新政府の参与にあてた訴文の草稿。

開国以来、開鎖の論をめぐって国内が紛糾し、多くの者が死んだことを述べ、今や徳川氏が冤罪を得て同胞相喰む情勢となり、関東百万の民が災をこうむるのは、王者の正道にもとり、国内の人心を離散せしめるものであると、朝敵となった旧幕臣を代表して内戦の非を訴えている。これより先二月二十二日に、徳川慶喜は上野寛永寺大慈院に入り恭順の意を表した。

国立国会図書館憲政資料室所蔵「大久保一翁文書」の中に、これ

と同文の海舟自筆意見書の写真が入っており、日付は「辰二月十五日」と書かれている。この憲政資料室本は、無罫紙（「渋田蔵書」料紙か）三枚に書かれており、「越前様御上屋敷 本多修理様御直披 勝安房」と書かれた包紙らしきものが写っている。講談社版全集は、これを底本にし十五日の日付を採用している（講談社版全集1「慶応四戊辰日記」補注14参照）。また、中根雪江「戊辰日記」は、二月十八日付の本多修理宛海舟書状とあわせて本書を写しているが、日付も二月十五日となっている。

一方、「海舟日記」慶応四年（一八六八）二月十七日条に「越之本多修理江託し参与江一書を呈す」とある。また「慶応四戊辰日記」（講談社蔵 講談社版全集1所収）同日条には、本書の全文が記されている。後者は日付を「辰三月」と記している。

本書には日付が記されていないが、前述の自筆意見書の存在と越前側の資料から、慶応四年二月十五日説を採用した。

〈改造社9 勁草14・19（「海舟日記」・別巻2（「海舟別記」） 講談社1（「慶応四戊辰日記」）・2〉

## 20 勝海舟宛西郷隆盛書簡

（慶応四年）三月十四日

資料番号 89205151

法量（本紙）縦一四・二cm×横五五・三cm

現状は卷子装。

田丁（田町）の薩摩藩邸にいたという勝海舟からの連絡に対し、早速向かうので少々待つて頂きたいとの西郷隆盛の返事。江戸開城をめぐる第二回目の西郷・勝会談直前の書状。

前日の芝高輪の薩摩藩邸での会談をうけ、この十四日には翌十五日の江戸城総攻撃を控えての大詰めの折衝が行われた。会談の結果、徳川慶喜の処遇、江戸城と武器の引き渡しなどの条件が整い、西郷の決断で江戸城攻撃は中止された。

会談の場所については諸説あるが、本書状の記載などから、三月十四日については田町の薩摩藩邸の説が有力と思われる。

なお、本資料は「亡友帖」（明治十一年）に収載されている。

〈改造社10（「亡友帖」影印本） 勁草別巻1 講談社22（「亡友帖」）〉

21 東征大総督府委任書（江戸鎮撫につき）

（慶応四年）閏四月二日

資料番号 89205201

法量（本紙）縦一九・一cm×横六五・〇cm

現状は卷子装。

東征大総督府より勝海舟に対し、江戸鎮撫万端につき取締を委任した書状。

慶応四年（一八六八）四月十一日の江戸開城後、脱走した旧幕兵が上野の山に立てこもったり、関東各地に転戦したりと、江戸内外は不安定な情勢であった。これに対し新政府は強硬な手段をとらず、海舟のほか旧幕方の徳川（田安）慶頼・大久保一翁の三名に、江戸の治安維持をゆだねた。「海舟日記」慶応四年四月二日条に「此夜田安殿より御使、大惣督より御書付被渡、小僕誠忠を以て御賞普、且江戸鎮撫の儀御委任可有之旨也」とあり、「慶応四戊辰日記」には本書の内容が記されている。

〈講談社1（「慶応四戊辰日記」）〉

22 勝海舟歎願書写（徳川慶喜江戸帰住につき）

（慶応四年）閏四月（四日）

資料番号 89205202

法量（本紙）縦一六・〇cm×横一八五・四cm

現状は卷子装。

慶応四年（一八六八）閏四月二日、江戸鎮撫を委任された勝海舟が東征大総督府に提出した歎願書の控。江戸鎮撫委任に対する礼を述べたあと、江戸を平穩にするためには、水戸に謹慎している徳川慶喜を江戸に呼び戻し、その威光で治めるのが最上策であると主張している。「海舟日記」慶応四年閏四月四日条に「大総督江微衷一封田安殿を以而献す、君上御還住之趣意を述す」とある。「慶応四戊辰日記」に本資料の写しが記されているが、文言は若干異なる。この歎願には、旧將軍家を江戸を統治する大名として存続させようとする海舟の執念があらわれている。さらに海舟は、回答に窮した総督府に対し、十三日再度意見書を提出して、江戸の治安回復と国内一致のため、徳川家への寛大な処置を求めた。

なお、本資料については、大正十四年（一九二五）維新史料編纂会によって謄写されたものが、東京大学史料編纂所に所蔵されている（「維新史料引継本」）。

〈改造社9 勁草14 講談社1（「慶応四戊辰日記」）・2〉

23 勝海舟意見書草稿（「人心離散之御答」）

（慶応四年）閏四月二十八日

資料番号 89205159

法量（本紙）縦一六・〇cm×横九四・〇cm

現状は卷子装。

江戸城引き渡しを終えた慶応四年（一八六八）閏四月二十八日、海舟が東征軍参謀西郷隆盛に、政治課題として残っていた徳川家領の処分について意見を送ったもの。意見は五か条からなり、新政府が徳川の領地を全て召し上げれば旧幕臣を養うことができず、下民を苦しめ人心を離散せしめてしまうだろうと警告し、外国がこの処分に注目しているとして、寛大な処分を強く求めている。

なお、「慶応四戊辰日記」（講談社蔵 講談社版全集1所収）慶応四年閏四月二十八日条に、「西郷参謀江一書を送り、且方今人心離散之基源を云ふ」として全文が記されており、文言は各全集ともこれとほぼ一致するが、本資料と比較すると若干異なる箇所がある。

〈改造社9 勁草14 講談社2〉

24 勝海舟宛八田知紀書簡

（慶応四年）七月十三日

資料番号 89205163

法量（本紙）縦一五・六cm×横二六九・七cm

現状は卷子装。

歌論によせて政治の大道を論じ、和歌の道でも文法などが正しくても歌の要所が押さえられていなければ真の歌にはならないように、政治においても目先の理屈にとらわれ、人心にもとることがあれば、遠大に行われがたいものであると述べている。

この書簡は「亡友帖」に収載されている。そこには海舟のコメントで、戊辰（慶応四）五月上野戦争の翌日、官兵が海舟の宅を襲撃する事件があるなど、命を狙われていた折に、六月薩摩藩の大久保利通と小松帯刀が海舟を訪れ、この時同伴していた八田和紀がのちに送ってきた書状であると記されている。

八田知紀は、薩摩藩士で歌人として有名。幕末期には、島津貞姫の入興に従って近衛家に仕え、勤王運動にも関わった。明治五年宮内省歌道御用掛となる。明治六年九月、七十五歳で没。

〈改造社10（「亡友帖」影印本） 勁草別巻2 講談社22（「亡友帖」）〉



25 勝小鹿海外渡航許可証写

明治二年六月九日

資料番号 86003001

法量 縦二七・二cm×横二〇・一cm

二つ折りの料紙（五枚）に書かれ、こよりで綴じられている。勝芳正氏（勝小鹿次女知代子の息）寄贈。

勝海舟の長男小鹿の海外渡航許可証（パスポート）の写し。

小鹿は、慶応三年（一八六七）七月アメリカに留学したが、明治新政府下での海外渡航志願者の願出方法が明治二年（一八六九）四月十七日に決まり、すでに渡航している者にも適用されるため、あらためて渡航申請が出され、発行されたものと思われる。後の外務大臣にあたる外国官知事の伊達宗城の名で発給されている。

小鹿ははじめ父海舟が私財を投ずる形で私費留学していたが、明治元年、明治新政府が在外の旧幕臣子弟の留学生のうち若干名を新政府の留学生にあらためて任命することとなり、同行していた富田鉄之助とともに四人の官費生に選ばれた。小鹿は明治十年（一八七七）にアナポリス海軍学校を卒業、帰国した。

本資料はいずれの全集にも未収である。

26 勝海舟宛柳原前光書簡

（明治二年）十月七日

資料番号 89205175

法量（本紙）縦一七・二cm×横一二八・五cm

現状は卷子装。

外務大丞柳原前光が勝海舟にあてた、朝鮮に関する海舟の著述の借用要請の書簡。

柳原は公卿で、戊辰戦争時には東海道先鋒副総督として、江戸開城のさい勅旨を伝えた。明治二年（一八六九）十月外務省に入り、以後外務官僚として活躍した。「海舟日記」明治二年十一月十一日条に「柳原様より御直書。朝鮮之事御出問、書類御借り被成度旨也」という記述があるが、本書状の日付が十月七日なので、約一か月の違いがある。「海舟日記」明治三年正月七日条欄外に、「柳原殿江象胥紀聞・韓地図説朝倉江附シ差出」とあり、海舟が柳原の要請に応じたようである。柳原は正月十五日、海舟に礼状を送った（講談社版全集2所収）。

本資料はいずれの全集にも未収である。

27 富田貞次郎宛勝海舟書簡

(明治四年) 正月八日

資料番号 96000021

法量(本紙) 縦一六・一cm×横六六・八cm

現状は卷子装。冒頭部分を欠く。歌川和子氏寄贈。

富田貞次郎にあてて勝海舟が送った書簡。

富田貞次郎(生没年未詳)は、山口県出身で、明治三年(一八七

〇) 法学研究のため官費留学生に選ばれイギリスに留学した。この留学は海舟の尽力によるものと思われ、「海舟日記」明治四年正月六日条には「富田貞次郎より来状、刑部省より留学被仰候間段々礼申越」とある。この時海舟は静岡にあり、イギリスへ行く途中アメリカで留学中の長男の小鹿に会う機会があったら、日本の様子を話すとともに、もっと勉強するようにとの伝言を依頼している。追書にみえるワルスと松田については未詳。

本資料はいずれの全集にも未収である。

28 勝海舟宛大山綱良書簡

(明治五年五月) 二十六日

資料番号 89205152

法量(本紙) 縦一六・五cm×横五七・八cm

現状は卷子装。冒頭、宛名部分が端截されて、本紙冒頭に貼り継がれている。また、末尾宛所となるべき部分が切断され欠損している。

在東京の鹿児島県参事大山綱良が、明治天皇の西国巡幸で急に帰県しなければならなくなったため、直接訪問して挨拶できなかったことを勝海舟に託びた書状。明治五年(一八七二)三月、海舟は静岡を離れ東京に帰ってきている。天皇は六月二十二日鹿児島に着き、七月二日まで県内を巡覧した。

大山綱良(格之助)は、薩摩藩士で西郷隆盛・大久保利通らとともに倒幕運動に参加した。戊辰戦争では奥羽各地を転戦し、その功により賞典禄八百石を受けた。明治四年鹿児島県参事、同六年権令から七年には県令となる。西郷下野後に開設された私学校を支援し、明治十年(一八七七)二月西南戦争が起こると官金十五万円を軍資に供した。その罪で三月官位を剝奪され、九月三十日長崎で斬刑に処された。五十三歳。

〈勁草別巻1〉

29 勝海舟宛三条美実書簡

(明治五年) 十一月朔日

資料番号 89205184

法量(本紙)縦一七・〇cm×横六四・二cm (包紙)縦一七・〇cm×横一一・〇cm

現状は卷子装。宛名の書かれた包紙が端截されて、本紙に貼り継がれている。

太政大臣三条美実が勝海舟に、台湾へ派遣する偵者の人選を依頼した書簡。

明治四年(一八七二)十一月、台湾に漂着した琉球人が現地人に殺害される事件が起きた。翌五年九月明治政府は、日清両国帰属の形をとっていた琉球国を日本国版図の琉球藩とした。この事件は日清両国間の外交問題に発展する。五年五月海軍大輔(卿不在のため大輔が実質的な長官)に任じられていた海舟は、台湾偵察の件で海軍少輔川村純義から相談を受けていた。「海舟日記」明治五年十月十七日条に「川村台湾之事(中略)并台湾江高屋井兩人可遣事等談す」とある。同月二十五日条には「此夜三条殿江参、台湾之儀二付愚存申上る」<sup>(マ)</sup>、晦日条には「三条殿江口上覚書差上、大輔の職務御免之事申上」と記されている。これに対する三条の返事が、この書簡と思われる。ただし、日記にはこの書簡のことは書かれていない。

本資料はいずれの全集にも未収である。

30 勝海舟意見書草稿(台湾出兵につき)

(明治七年五月頃)

資料番号 89205181

法量(本紙)縦一六・七cm×横六四・四cm

現状は卷子装。

明治四年(一八七二)十一月、台湾に漂着した琉球人が現地住民に殺害された事件の問責交渉は、琉球の帰属問題にも関連し、清国との重大な外交問題となった。七年二月明治政府は台湾出兵を決定し、四月西郷従道を台湾蕃地事務都督に、大隈重信を台湾蕃地事務局長に任じた。しかし、米英両国が局外中立の姿勢を示し、出兵に反対する参議木戸孝允が辞表を出したことで、政府はいったん出兵中止を決めたが、西郷が強硬にこれをすすめ、五月十七日長崎を発ち台湾に進撃した。この時海舟は海軍卿であったが、海軍内部では海軍少将伊東祐磨など海舟と同じく台湾出兵反対派と、出兵を主張する海軍少輔川村純義らがあり、五月に川村が辞表を出すなど内部の不調和が生じて、海舟は苦慮していた。

この意見書で海舟は、台湾出兵について、清国との関係に配慮するよう忠告してきたのを無視した結果、今日の事態になったことを指摘した。さらに海軍内でも不服が生じて自分には強いて命令するにしのびないので、陸海軍の全権は都督西郷・局長大隈に委任して出兵の目的を貫徹すればいいと述べている。「海舟日記」明治七年五

月十二日条には「唯武連來訪、都督并局長江兵權御任せ之申立、川村辞表差出候旨申越」とあり、この意見書はこのころ提出されたものと思われる。

本資料はいずれの全集にも未収である。

31 内達（台湾出兵につき）

明治七年八月二日

資料番号 89205182

法量（本紙）縦二〇・六cm×横七〇・七cm

現状は卷子装。「内達演説書」（次号）が付属する。

台湾処分につき、万一清国と戦端が開かれることになった場合は、軍事方略を陸海軍に専任させるのでよろしく協議せよとの内達書。

明治七年（一八七四）五月にはじまった台湾出兵は、清国との交渉の段階に入り、八月一日大久保利通が全権弁理大臣となった。一方、七月八日の閣議では清との戦争もやむなしとし、陸海軍に対し軍事作戦を協議するよう決めた。本内達は、この趣旨を海軍卿である勝海舟に通達したものである。「海舟日記」明治七年八月二日条には、「旧地之事務、陸軍協議之御内達有」と記されている。戦争に反対する海舟は七月の閣議を欠席し、海軍部内でも困難な立場とな

り、しきりに辞意を表明した。八月二十八日、海舟は軍艦「東艦」が長崎で破損した責任をとって待罪書を提出し、その後閣議に出席せず、翌八年四月によりやく辞職が承認された。

本資料はいずれの全集にも未収である。

32 内達演説書（台湾出兵につき）

（明治七年八月二日）

資料番号 89205183

法量（本紙）縦二〇・六cm×横五一・七cm

現状は卷子装。前号「内達」の付属文書。

台湾問題で清との交渉のため公使派遣が決まり、清との和親を破らないよう交渉につとめるが、交渉が決裂した場合は開戦も辞さないとの閣議で決定したため、陸海軍は省議をつくして軍事作戦を協議するよう指示している。

本資料はいずれの全集にも未収である。

33 勝海舟意見書写（徳川家手許金につき）（明治十年以前）

資料番号 89205178

法量（本紙）縦一六・〇cm×横六三・六cm

現状は卷子装。「37 徳川家々政ニ付愚存」の余白に重ねて貼り込まれている。

幕府崩壊時に徳川家の御手許金を残らず取り集め大判二五〇〇枚（六万両に相当）に替えた金の取り扱いについて記したもの。徳川家が七〇万石を下賜された時に、この手許金を返上しようとしたが、時の政府が不同意であった。そこでこれをもとに新領地の三河・遠江・駿河の大農主から田畑山林を買い上げ、徳川家の家産にするつもりであったが、結局そのまま現在に至ってしまったので、当主の徳川家達（文中の「三位殿」）の留学費用に充当するように提言している。

本資料の年次は不明だが、家達の留学費について言及していることから、家達がイギリス留学をした明治十年（一八七七）十月から同十五年十月の間またはそれ以前と考えられる。

本資料はいずれの全集にも未収である。

34 松平春嶽宛勝海舟書簡（付副状）（明治十九年）十一月十八日

資料番号 94100141

法量（本紙）縦一六・五cm×横二八・八cm（副状）縦二三・二cm×横六七・九cm（封筒）縦一九・二cm×横一四・四cm

現状は巻軸装。勝部真長氏寄託。

書簡を納めた白封筒に十一月十九日の日付で、勝海舟からの「秘密書翰」であることが記され、松平慶永（春嶽）の署名がある。封筒裏上下には、「慶永」の封印がある。十一月十九日は松平春嶽が書簡を受け取った日。副状は二つ折りした料紙二枚にわたって書かれている。

「海舟日記」明治十九年十一月二十日条には「一昨日、春嶽殿江一堂殿御出府の転末趣意書差出」とある。「一堂」は海舟が贈った徳川慶喜の号。

明治十九年秋、慶喜は生母吉子への病氣見舞のため、極秘に静岡を出て十一月五日生家である東京の水戸徳川家へ入り十五日まで滞在した。この慶喜の出府について、海舟の存念を春嶽に説明したのがこの書簡である。海舟はこの件について、政府には正式な届けを出さず黙認の形をとったこと、慶喜が千駄ヶ谷の家達邸に立ち寄りなかつたこと、春嶽ら親戚へも事前に知らせず帰途内々に会うことになった経緯を述べ、慶喜が私情でみだりに東京に出て軽々しいふ

るまいをしては、一段も二段も低い扱いを受けてしまうだろうと、今後の慶喜の東京帰住の環境を整えるための配慮であったことを説明している。

文中、「確堂様」は、旧津山藩主で維新後家達の後見人となった松平斉民（十一代將軍家斉の十六男）のこと。

「海舟日記」明治十九年十一月二日条には、「慶喜殿明後日水戸江御著之旨、宮内省江は無御届、伊藤大臣吞込被成候哉、山岡より申談濟」とある。慶喜はその後、数度の出府をへて明治三十年十一月東京に帰住、翌年三月に明治天皇との対面を果たした。

本資料はいずれの全集にも未収である。

### 35 勝海舟意見書写（条約改正につき）

（明治二十二年）十月二十日

資料番号 89205162

法量（本紙）縦一七・五cm×横六八・五cm

現状は卷子装。冒頭に「十六日大臣遭変あり、人心騒然廟堂一定、黙止に不忍、松方西郷両氏へ送之」と記され、この意見書が明治二十二年（一八八九）十月二十日に大蔵大臣松方正義と海軍大臣西郷従道にあてられたものであることがわかる。筆跡から見て、勝

海舟の自筆ではなく、他筆による写本か。

当時は黒田清隆内閣で、外務大臣大隈重信が条約改正の交渉にあっていた。しかし国内では大隈案に対する反対論が高まり、十月十一日大隈案に反対の枢密院議長伊藤博文が辞表を提出、十五日開かれた御前会議は不調に終わり、十八日大隈が爆弾を投げられ負傷する事件が起きた。海舟は政府の進める条約改正について、民意を離れた性急な改正であるなら中止すべきであるという考えであった。

「海舟日記」明治二十二年十月二十日条に、「松方西郷江一封遣」とあり、この意見書を送ったことが記されている。この中で海舟は、薩長など「独立不羈之侯伯」が幕府の外交政策を嫌って幕府を倒したのに、その侯伯たちが政府の要人となり、今外国の国法によって苦しんでいると皮肉った。この二度の大臣の遭難事件（二月十一日文部大臣森有礼殺害、十月十八日大隈重信暗殺未遂）は、自然の大道に反し、人心の向背を察しなかった結果であると指摘、早く閣議一決し国民から恨みを買わないように猛省をうながしている。しかし、海舟の忠告は採用されず、二十五日黒田内閣は倒れた。

本資料とほぼ同文の海舟自筆草稿が、講談社に所蔵されており、講談社版全集は、これを底本としている。講談社本は、明治期の海舟がしばしば用いた、崩し止の地紋で天地に金泥をひいた料紙に書かれており、数ヶ所に加除訂正痕がある。

36 柴田松之丞歎願書

明治二十六年八月十五日

資料番号 94100144

法量 縦二五・〇cm×横一五・六cm

二つ折りの料紙五枚にわたって書かれ、こよりで綴じられている。勝部真長氏寄託。

柴田松之丞が木部謙司と連名で、勝海舟にあてた歎願書。

明治五年、静岡から帰京した海舟は、赤坂氷川町の二五〇〇坪におよぶ広大な宅地を松之丞の父柴田七九郎から購入して、生涯を終えるまでの住まいとした。柴田家はもと五五〇〇石の旗本であった。「海舟日記」明治五年（一八七二）五月二十三日条に「柴田七九郎江家作譲受代五百両渡す」とある。

この歎願書によると、柴田家は明治維新後没落して家計が困難になったため、旧知の縁で海舟に邸宅を売却した。しかしその後も生活は困難をきわめ、七九郎夫妻は元の知行地である丹波国へ赴き、おちぶれた生活の中、松之丞の母が死んだ。松之丞は四谷区北伊賀町の知人木部のもとに寄宿しているが、木部家も困窮するようになったので、海舟に資金の援助を懇願している。

37 勝海舟意見書写（徳川家々政二付愚存） 明治二十七年七月

資料番号 89205177

法量（本紙）縦二四・一cm×横一五五・一cm

現状は卷子装。二つ折りの料紙（六枚か）に書かれている（終尾二枚は余白）。一枚目は表紙で、料紙左端にあたる部分（表題より右部分は端截されている）に「明治廿七年七月徳川家々政二付愚存」と勝海舟の自筆で表題が記されている。

勝海舟が徳川家達にあてたもので、旧徳川將軍家の存続は、家康以来の威徳と、幕末維新の変革時にあつては朝廷の厚恩によるものであつたことを強調し、徳川慶喜と現当主の家達に自重するよう訓戒している。さらに、現在の徳川宗家は、朝恩により新規に取り立てられた家であり、公儀上における家達の祖宗および慶喜への対し方について注意を促している。最後に、この問題は久保一翁や山岡鉄舟が深く苦慮していたことであり、兩人はすでに故人となつてしまったので、自分が代わって申し上げているのであると記している。

なお、松戸市戸定歴史館には、慶喜の筆によると思われる「御家

之大旨趣愚存」と題するこの意見書の写しと、明治二十七年七月付の海舟が宮内大臣土方久元にあてた書付の写しが所蔵されている。

これによると、この意見書は海舟から家達に出された後、家達から旧幕臣の溝口勝如を通じて慶喜に見せられた。また、土方久元あての書付には、慶喜の東京での居住先について海舟の意見が述べられており、家達あてのこの意見書は、慶喜の東京帰住後の慶喜家と徳川宗家との関係を確認するために書かれたものと考えられる（松戸市戸定歴史館『徳川慶喜』展図録参照）。

本資料はいずれの全集にも未収である。

### 38 勝海舟意見書草稿（「朝鮮所置愚説」）

明治二十八年五月二十一日

資料番号 89205174

法量（本紙）縦二三・九cm×横一〇一・一cm

現状は卷子装。二つ折りの料紙（五枚か）に書かれている。一枚目は表紙で、料紙左端にあたる部分（表題より右部分は端截されている）に「廿八年五月廿一日 朝鮮所置愚説」と勝海舟の自筆で表題が記されている。また最後の料紙には、「物いつて 人おどろかす ところ（泥）仏」という句が認められている。

日清戦争後、朝鮮へのロシアが影響力が増大したので、明治政府は窮地に立たされ、朝鮮への措置に苦慮していた。これに対して海舟はこのような意見書を政府当局者に送った。「海舟日記」明治二十八年（一八九五）六月一日条には「松方ヲ訪ふ、朝鮮所分遼東之所置愚存書を示す」とある。

この意見書で海舟は、日本の対朝鮮政策はその初めから誤りであり、このままでは隣国（ロシア）が、日本の措置は東洋の治安を乱すものとして介入してくるだろうと述べ、今後の朝鮮についてはロシアに清国を加えて三か国間で協議して問題を解決すべきと提言している。しかし、清国の力を弱める政策をとっていた伊藤内閣は、この主張を受け入れることなく、十月には閔妃暗殺事件を起こし、翌二十九年二月には朝鮮国王がロシア公使館に移る「露館播遷」事件へと、ロシアとの対立を深める路線を進んだ。

〈改造社10 勁草別巻2 講談社22〉



39 勝海舟意見書草稿写（五月之私議草稿扣）

明治二十八年五月

資料番号 89205169

法量（本紙）縦二三・九cm×横九〇・九cm

現状は卷子装。二つ折りの料紙（六枚か）に書かれている。一枚目は表紙で、料紙左端にあたる部分（表題より右部分は端裁されている）に「五月之私議草稿扣」と勝海舟自筆の表題がある。

明治二十八年（一八九五）四月の日清講和条約調印後、遼東半島の割譲に反対する独・仏・露の三か国は日本に清国への返還を勧告し（三国干涉）、これを受けて明治政府は五月十日遼東半島返還の詔を出した。本書はこれに先だって書かれたものと思われる。三国干涉について、海舟は「三国の申出に対し深謝すべきなり」とこれを歓迎し、さらに償金のごときはみだりに受領せず、清国と協議して鉄道を共同で敷設し、旅順などの良港に直結させ、満州方面の物資を集積する大貿易場として、東洋発展の促進を図るよう提案している。さらにこの戦争で多くの兵士が戦死したことに言及し、鉄道敷設が彼らの功に報いる道であると述べている。

なお、本資料とほぼ同文で「五月十六日議長江示す」と注記のある自筆草稿が、富岡美術館に所蔵されている。明治期の海舟がしばしば用いた、崩し卍の地紋で天地に金泥をひいた料紙に書かれてお

り、加除訂正痕等から、富岡美術館本の方が本資料より前の段階に書かれた草稿であると考えられる。

本資料はいずれの全集にも未収である。

40 勝海舟意見書草稿（近事私議第二）

明治二十八年十一月二十一日

資料番号 89205168

法量（本紙）縦二三・九cm×横一五五・〇cm

現状は卷子装。二つ折りの料紙（四枚か）に書かれている。一枚目は表紙で、料紙左端にあたる部分（表題より右部分は端裁されている）に「明治廿八年五月 同年十一月 近事私議第二」と勝海舟の自筆で表題が記されている。

この意見書で海舟は、明治維新で幕府を倒した藩閥が維新後二十八年たった今、国民から攻撃されているさまを述べた上で、日本が清国から遼東半島返還の償金を受け取った（十月三十一日）との報について、「五月之私議」（前号）で示した日清共同の鉄道敷設案をあらためて提示し、日・清・露で協議すべきことを提言している。

最後にこれまでの外交のつまづきの結果、ここ数年来大津事件（明治二十四年五月）や清国全權大使李鴻章への傷害事件（明治二十八

年三月)、閔妃暗殺事件(同年十月)のような事件が相次いでいることを指摘し、この最悪の状況を打開するには、現政府の決断にかかっているとしている。

五月の時と同じく伊藤内閣はこの意見を無視したが、一方清国は翌二十九年五月李鴻章とロシア交通相ウィツテとの間で露清条約を結び、日本の攻撃に対する共同防衛を密約するとともに、ロシアが東清鉄道の敷設権を獲得し、日本は孤立することとなった。

なお、翌二十九年二月には「近事私議第二」と題する意見書が書かれている(講談社蔵 講談社版全集2所収)。

本資料はいずれの全集にも未収である。

勝海舟関係資料 マイクロフィルム版目録

1. 文書の部

史料番号	資料番号	請求記号	検索№	コ	マ	資 料 名	年 代
1	89205179	FKA/2/1	22		0001-0005	勝海舟意見書写 (「伊勢岡宮御警衛向ニ付申上候書付」)	安政2年4月
2	89205153	FKA/2/1	4		0001-0008	勝海舟宛島津斉彬書簡	(安政5年) 4月12日
3	89205193	FKA/2/1	33		0001-0005	勝海舟宛松平信敏書簡	(文久3年) 7月8日
4	89205165	FKA/2/1	12		0001-0005	勝海舟意見書写 (「江戸御警衛」)	(文久3年8月)
5	89205166	FKA/2/1	13		0001-0007	勝海舟意見書草稿 (「御府内四方堡塞大略」)	(文久3年8月)
6	89205189	FKA/2/1	29		0001-0005	松平春嶽宛勝海舟書簡草稿	(文久3年) 9月10日
7	89205192	FKA/2/1	32		0001-0006	勝海舟宛松平春嶽書簡	(文久3年) 11月10日
8	89205190	FKA/2/1	30		0001-0003	勝海舟意見書草稿 (徳川家茂再上洛につき)	(文久3年) 11月 (12日頃)
9	89205191	FKA/2/1	31	1		松平春嶽宛勝海舟書簡草稿	(元治元年2月6日)
10	89205199	FKA/2/1	37		0001-0007	佐久間象山遭難報告書	(元治元年) 7月16日
11	89205186	FKA/2/1	27		0001-0004	勝海舟意見書草稿 (第一次長州征討につき)	(元治元年8月以降)
12	89205150	FKA/2/8	1	1		勝海舟宛西郷隆盛書簡	(元治元年) 9月11日
13	89205198	FKA/2/1	36		0001-0005	勝海舟宛土方歳三書簡	(元治元年) 9月16日
14	89205155	FKA/2/1	5		0001-0005	松平春嶽宛勝海舟書簡草稿	(慶応元年) 10月5日
15	89205187	FKA/2/1	28		0001-0004	勝海舟伺書草稿 (「芸州表江為御用向罷越候心得伺」)	(慶応2年) 8月17日
16	89205196	FKA/2/8	2	1		御沙汰書 (和宮警衛と帰洛の便宜につき)	(慶応4年正月受領)
17	89205195	FKA/2/8	3	1		御沙汰書副状	(慶応4年正月受領)
18	89205158	FKA/2/1	7		0001-0005	勝海舟歎願書草稿 (京都新政府軍の江戸攻撃に対する代訴文)	(慶応4年正月18日)
19	89205161	FKA/2/1	9		0001-0004	勝海舟意見書草稿 (京都新政府へ関東の実情につき訴文)	(慶応4年2月15日)
20	89205151	FKA/2/8	4	1		勝海舟宛西郷隆盛書簡	(慶応4年) 3月14日
21	89205201	FKA/2/1	38		0001-0004	東征大総督府委任書 (江戸鎮撫につき)	(慶応4年) 閏4月2日
22	89205202	FKA/2/1	39		0001-0006	勝海舟歎願書写 (徳川慶喜江戸帰任につき)	慶応4年閏4月 (4日)
23	89205159	FKA/2/1	8		0001-0005	勝海舟意見書草稿 (「人心離散之御答」)	(慶応4年) 閏4月28日
24	89205163	FKA/2/1	11		0001-0011	勝海舟宛八田知紀書簡	(慶応4年) 7月13日
25	86003001	FKA/2/8	10		0001-0006	勝小鹿海外渡航許可証写	明治2年6月9日
26	89205175	FKA/2/1	19		0001-0005	勝海舟宛柳原前光書簡	(明治2年) 10月7日
27	96000021	FKA/2/8	10		0001-0005	富田貞次郎宛勝海舟書簡	(明治4年) 正月8日
28	89205152	FKA/2/8	6	1		勝海舟宛大山綱良書簡	(明治5年5月) 26日
29	89205184	FKA/2/1	26		0001-0004	勝海舟宛三条実美書簡	(明治5年) 11月朔日
30	89205181	FKA/2/8	8	1		勝海舟意見書草稿 (台湾出兵につき)	(明治7年5月頃)
31	89205182	FKA/2/1	24		0001-0002	内達 (台湾出兵につき)	明治7年8月2日
32	89205183	FKA/2/1	25		0001-0002	内達演説書 (台湾出兵につき)	(明治7年8月2日)
33	89205178	FKA/2/1	21		0001-0003	勝海舟意見書写 (徳川家手許金につき)	(明治10年以前)
34	94100141	FKA/2/5	11		0001-0004	松平春嶽宛勝海舟書簡 (付副状)	(明治19年) 11月18日
35	89205162	FKA/2/1	10		0001-0003	勝海舟意見書写 (条約改正につき)	(明治22年) 10月20日
36	94100144	FKA/2/5	13		0001-0006	勝海舟宛柴田松之丞歎願書	明治26年8月15日
37	89205177	FKA/2/1	20		0001-0005	勝海舟意見書写 (「徳川家々政ニ付愚存」)	明治27年7月
38	89205174	FKA/2/1	18		0001-0005	勝海舟意見書草稿 (「朝鮮所置愚説」)	明治28年5月21日
39	89205169	FKA/2/1	15		0001-0004	勝海舟意見書草稿写 (「五月之私議草稿扣」)	明治28年5月
40	89205168	FKA/2/1	14		0001-0006	勝海舟意見書草稿 (「近時私議第一」)	明治28年11月21日

## 2. 著作の部

資料番号	請求記号	検索№	コ マ	資 料 名	年 代
94100145	FKA/2/5	14	0001-0028	「夢酔卯年ひろいか記」	(天保14年)
94100140	FKA/2/5	10	0001-0097	「掌記 一」	安政2年以降
89205156	FKA/2/1	6	0001-0003	神戸海軍操練所碑文稿	元治元年10月8日以前
94100132	FKA/2/5	2	0001-0113	「海舟日記抄」浄書稿本 1	(明治前期)
94100133	FKA/2/5	3	0001-0074	「海舟日記抄」浄書稿本 2	(明治前期)
94100134	FKA/2/5	4	0001-0037	「海舟日記抄」浄書稿本 3	(明治前期)
94100135	FKA/2/5	5	0001-0105	「海舟日記抄」浄書稿本 4	(明治前期)
94100136	FKA/2/5	6	0001-0052	「海舟日記抄」浄書稿本 5	(明治前期)
94100137	FKA/2/5	7	0001-0101	「海舟日記抄」浄書稿本 6	(明治前期)
94100138	FKA/2/5	8	0001-0064	「海舟日記抄」浄書稿本 7	(明治前期)
94100139	FKA/2/5	9	0001-0038	「海舟日記抄」浄書稿本 8	(明治前期)
89205203	FKA/2/1	40	0001-0022	「断腸之記」稿本 1	明治11年11月序
89205204	FKA/2/1	41	0001-0022	「断腸之記」稿本 2	明治11年11月序
89204086	FKA/2/8	12	0001-0033	「勝海舟先生詩草真蹟」	(明治19年頃)
89205205	FKA/2/1	42	0001-0073	「雑記 瓦解以来会計草稿」	(明治中期)
89205206	FKA/2/1	43	0001-0133	「戊辰以来会計荒増」浄書稿本	(明治中期)
89205243	FKA/2/4	9	0001-0058	「海舟別記」 1	明治前～中期
89205244	FKA/2/4	10	0001-0061	「海舟別記」 2	明治前～中期
89205245	FKA/2/4	11	0001-0064	「海舟別記」 3	明治前～中期
89205246	FKA/2/4	12	0001-0059	「海舟別記」 4	明治前～中期
89205247	FKA/2/4	13	0001-0061	「海舟別記」 5	明治前～中期
89205207	FKA/2/1	44	0001-0071	「吹塵録」浄書稿本 首	明治20年
89205208	FKA/2/1	45	0001-0129	「吹塵録」浄書稿本 1	明治20年
89205209	FKA/2/1	46	0001-0072	「吹塵録」浄書稿本 2	明治20年
89205210	FKA/2/1	47	0001-0068	「吹塵録」浄書稿本 3	明治20年
89205211	FKA/2/1	48	0001-0050	「吹塵録」浄書稿本 4	明治20年
89205212	FKA/2/1	49	0001-0059	「吹塵録」浄書稿本 5	明治20年
89205213	FKA/2/2	1	0001-0096	「吹塵録」浄書稿本 6	明治20年
89205214	FKA/2/2	2	0001-0084	「吹塵録」浄書稿本 7	明治20年
89205215	FKA/2/2	3	0001-0103	「吹塵録」浄書稿本 8	明治20年
89205216	FKA/2/2	4	0001-0077	「吹塵録」浄書稿本 9	明治20年
89205217	FKA/2/2	5	0001-0076	「吹塵録」浄書稿本 10	明治20年
89205218	FKA/2/2	6	0001-0070	「吹塵録」浄書稿本 11	明治20年
89205219	FKA/2/2	7	0001-0039	「吹塵録」浄書稿本 12	明治20年
89205220	FKA/2/2	8	0001-0053	「吹塵録」浄書稿本 13	明治20年
89205221	FKA/2/2	9	0001-0104	「吹塵録」浄書稿本 14	明治20年
89205222	FKA/2/2	10	0001-0098	「吹塵録」浄書稿本 15	明治20年
89205223	FKA/2/2	11	0001-0082	「吹塵録」浄書稿本 16	明治20年
89205224	FKA/2/3	1	0001-0071	「吹塵録」浄書稿本 17	明治20年
89205225	FKA/2/3	2	0001-0092	「吹塵録」浄書稿本 18	明治20年
89205226	FKA/2/3	3	0001-0099	「吹塵録」浄書稿本 19	明治20年
89205227	FKA/2/3	4	0001-0064	「吹塵録」浄書稿本 20	明治20年
89205228	FKA/2/3	5	0001-0096	「吹塵録」浄書稿本 21	明治20年
89205229	FKA/2/3	6	0001-0085	「吹塵録」浄書稿本 22	明治20年
89205230	FKA/2/3	7	0001-0076	「吹塵録」浄書稿本 23	明治20年
89205231	FKA/2/3	8	0001-0087	「吹塵録」浄書稿本 24	明治20年
89205232	FKA/2/3	9	0001-0057	「吹塵録」浄書稿本 25	明治20年
89205233	FKA/2/3	10	0001-0063	「吹塵録」浄書稿本 26	明治20年
89205234	FKA/2/3	11	0001-0087	「吹塵録」浄書稿本 27	明治20年
89205235	FKA/2/4	1	0001-0064	「吹塵録」浄書稿本 28	明治20年
89205236	FKA/2/4	2	0001-0051	「吹塵録」浄書稿本 29	明治20年
89205237	FKA/2/4	3	0001-0074	「吹塵録」浄書稿本 30	明治20年
89205238	FKA/2/4	4	0001-0049	「吹塵録」浄書稿本 31	明治20年
89205239	FKA/2/4	5	0001-0127	「吹塵録」浄書稿本 32	明治20年
89205240	FKA/2/4	6	0001-0075	「吹塵録」浄書稿本 33	明治20年



史料番号	資料番号	請求記号	検索No	コ マ	資 料 名	年 代
—	89205241	FKA/2/4	7	0001-0092	『吹塵録』浄書稿本 34	明治20年
—	89205242	FKA/2/4	8	0001-0121	『吹塵録』浄書稿本 35	明治20年
—	96201870	FKA/2/8	11	0001-0011	「昭徳公の靈に告ぐ慚愧書」草稿	明治21年8月20日
—	89205171~2	FKA/2/1	16	0001-0004	「洗足軒の記并歌」	明治24年仲春
—	89205171~2	FKA/2/1	17	0001-0003	「洗足軒の記并歌」	
—	89207047	FKA/2/4	14	0001-0003	サンフランシスコクロニクル新聞 記事訳文	明治27年12月28日訳
—	89207048	FKA/2/4	15	0001-0009	サンフランシスコクロニクル新聞 記事切り抜き	1894年(明治27)9月24日
—	94201697	FKA/2/5	15	0001-0054	「海舟日記」1	文久2年間8月17日~文久3年3月16日
—	94201698	FKA/2/5	16	0001-0105	「海舟日記」2	文久3年3月16日~同年10月3日
—	94201699	FKA/2/5	17	0001-0110	「海舟日記」3	文久3年10月3日~元治元年7月9日
—	94201700	FKA/2/6	1	0001-0111	「海舟日記」4	元治元年7月10日~慶応元年8月28日
—	94201701	FKA/2/6	2	0001-0141	「海舟日記」5	慶応元年9月1日~慶応3年2月25日
—	94201702	FKA/2/6	3	0001-0060	「海舟日記」6	慶応3年1月28日~慶応4年4月26日
—	94201703	FKA/2/6	4	0001-0109	「海舟日記」7	慶応4年4月28日~明治2年3月20日
—	94201704	FKA/2/6	5	0001-0108	「海舟日記」8	明治2年3月21日~明治3年7月24日
—	94201705	FKA/2/6	6	0001-0110	「海舟日記」9	明治3年10月24日~明治5年1月5日
—	94201706	FKA/2/6	7	0001-0102	「海舟日記」10	明治5年1月15日~明治7年1月20日
—	94201707	FKA/2/6	8	0001-0099	「海舟日記」11	明治7年1月21日~明治8年5月14日
—	94201708	FKA/2/6	9	0001-0099	「海舟日記」12	明治8年5月15日~明治9年12月3日
—	94201709	FKA/2/6	10	0001-0101	「海舟日記」13	明治9年12月4日~明治11年6月10日
—	94201710	FKA/2/6	11	0001-0098	「海舟日記」14	明治11年6月11日~明治12年9月23日
—	94201711	FKA/2/7	1	0001-0103	「海舟日記」15	明治12年9月24日~明治14年1月31日
—	94201712	FKA/2/7	2	0001-0159	「海舟日記」16	明治14年2月1日~明治15年12月31日
—	94201713	FKA/2/7	3	0001-0094	「海舟日記」17	明治16年1月1日~明治17年5月31日
—	94201714	FKA/2/7	4	0001-0098	「海舟日記」18	明治17年6月1日~明治18年10月9日
—	94201715	FKA/2/7	5	0001-0092	「海舟日記」19	明治18年10月10日~明治19年12月31日
—	94201716	FKA/2/7	6	0001-0091	「海舟日記」20	明治20年1月1日~明治21年1月2日
—	94201717	FKA/2/7	7	0001-0102	「海舟日記」21	明治21年1月1日~明治22年4月30日
—	94201718	FKA/2/7	8	0001-0093	「海舟日記」22	明治22年5月1日~明治23年4月12日
—	94201719	FKA/2/7	9	0001-0100	「海舟日記」23	明治23年4月12日~明治24年6月30日
—	94201720	FKA/2/7	10	0001-0099	「海舟日記」24	明治24年7月1日~明治25年9月22日
—	94201721	FKA/2/7	11	0001-0054	「海舟日記」25	明治25年9月24日~明治31年12月31日